高等部

この 1 年間の取り組みについて

高等部部長　佐藤史伸

2025 年度は、自由学園高等部が「共生共学」の歩みを始めて 2 年目となった。2024 年度が、長く続いた男女別学から共学へと大きく踏み出した「始まりの年」であったとすれば、2025 年度は、その新しい環境の中で生まれた生活を、自分たちのものとして育て、深めていく一年であった。

共学であることは、生徒たちにとって次第に特別なことではなく、日常となってきた。しかし、異なる考えや背景を持つ人と共に生活するとはどういうことなのか、自分の自由と他者の自由をどのように大切にするのかという問いは、日々の生活の中で、より具体的なものとなった。

高等部が大切にしてきた「自由のための自労自治」は、完成された仕組みを受け継ぐだけのものではない。目の前の生活を自分たちで見つめ、考え、対話し、必要であれば変えていく。その繰り返しの中にこそ、自治の学びがある。共学 2 年目は、そのことを改めて実感する一年となった。

■最初に

共学 1 年目には、「互いを知り、認め合い、共に生きる」ことを大切にしてきた。2 年目となった今年度は、そこからさらに一歩進み、違いがあることを前提として、どのように一緒に生活を創っていくのかが問われた。

そのことは、日常生活だけでなく、遠足、平和について考える取り組み、体操会、文化祭、クリスマスなど、さまざまな行事にも表れた。これまで自由学園が大切にしてきたものを受け継ぎながらも、共学となった今の高等部にふさわしい形を、生徒自身が考え、創ろうとしてきた。

いつも意見が一致するわけではない。考え方の違いから話し合いに時間がかかったり、思うように進まなかったりすることもあった。しかし、効率よく結論を出すことだけを目指すのではなく、互いの言葉を聞き、自分の考えを伝え、時には立ち止まりながら一緒に答えを探していく。その過程そのものが、共学 2 年目の高等部にとって大切な学びであった。

■高等部の生活について

【授業】

2025 年度も、教室の中だけで完結しない学びがさまざまな形で行われた。授業の中で知識を得るだけではなく、仲間との対話を通して自分とは異なる考えに触れ、自ら問いを持ち、それをさらに探究していく学びが続けられた。

共学 2 年目となり、男女が一緒に学ぶこと自体は日常の風景となった。その中で重要になったのは、性別に限らず、一人ひとりの違いを学びの豊かさとして受け止めることであった。同じ問いに対しても、経験や関心によって見方は異なる。その違いを聞き合うことによって、自分一人では気づくことのできなかった視点を得ることができる。

探求や共生学においても、学園の中だけではなく社会に目を向け、自らの問いを実際の社会と結びつけて考える取り組みが続けられた。高 2・高 3 の「飛び級社会人」では、社会で実際に活動している方々との出会いを通して、教室での学びと現実の社会とのつながりについて考える機会を持った。

また、戦後 80 年という節目の年に、平和について考える取り組みも行われた。戦争を過去の出来事として学ぶだけでなく、「平和を願う人から、平和を創る人へ」ということを高等部全体で考えた。平和は遠くにある大きな問題だけではなく、目の前にいる人の声を聞くこと、自分と異なる人を排除しないこと、対話によって関係をつくることから始まる。そのことを日々の生活と結びつけて考える機会となった。

【礼拝】

毎朝の礼拝は、今年度も高等部の生活の中心にあった。讃美歌を歌い、聖書の言葉や話す人の言葉に耳を傾け、静かに自分自身を振り返る時間を共にした。

遠足を前にした礼拝では、自然の中に身を置くことを通して、日常とは異なる場所で自分自身や神の存在について考えること、そして「非日常の経験によって、自分の日常を増やしていく」ことについて考えた。

また、戦後 80 年を迎え、戦没者追悼礼拝などを通して平和について考える機会を持った。「平和を実現する人々は、幸いである」という聖書の言葉から、平和を願うだけではなく、自分たちが日々の生活の中で平和を創る人になるとはどういうことなのかを考えた。

礼拝で語られる「愛」「平和」「隣人」「希望」という言葉が、委員会や寮、クラスでの人間関係の中でどのように実践されるのか。礼拝と生活とが切り離されることなくつながっていくことを、今年度も大切にしてきた。

【食事】

昼食は、今年度も高等部全体が一つの場所に集う大切な時間であった。学年やクラスを越えて同じ食卓を囲み、顔を合わせ、言葉を交わす。その毎日の積み重ねが、高等部という一つの社会をつくっている。

特に年度末には、高 3 の生徒たちが自分たちから昼食づくりを申し出て、実際に高等部の昼食をつくる機会があった。卒業を前にした生徒たちが、それまで自分たちが毎日いただいてきた昼食を、今度は自分たちの手でつくり、仲間に提供する側に回った。

「してもらう」側から「する」側へ。毎日当たり前のように用意される食事が、多くの人の働きによって成り立っていることを、自ら働くことを通して知る姿がそこにはあった。高等部での生活の最後に、このような自主的な働きが生まれたことは、高 3 らしい姿であった。

【労作（自治区域）】

自治区域での労作も、日々の生活を自分たちの手でつくる大切な営みとして続けられた。夏の草取りや草刈り、秋から冬にかけての落ち葉掃きなど、季節の変化に応じて必要な仕事を行った。

これらの仕事は華やかなものではなく、終わったと思っても草はまた伸び、落ち葉はまた積もる。しかし、その繰り返しの中にこそ、生活を自分たちの手で支える意味がある。「誰かがやってくれる」のではなく、「自分たちの生活だから自分たちで行う」。そして、自分のためだけではなく、共に生活する人のために身体を動かす。こうした日常の小さな働きが、「自労自治」を支える土台となっている。

【行事】

遠足、体操会、文化祭、クリスマスなどの行事においても、共学 2 年目ならではの姿が見られた。

今年度の遠足は尾瀬で行った。参加人数が多いため、A 日程と B 日程の 2 回に分け、生徒の係もそれぞれの遠足に向けて準備を進めた。A 日程は天候にも恵まれ、予定していた行程を歩くことができた。一方、B 日程はまったく異なる遠足となった。尾瀬へ向かってバスで出発したものの現地は雷雨となり、安全を最優先して予定していた行程をすべて取りやめることとなった。結果として、生徒たちは現地でバスを降りることなく、そのまま学園へ引き返した。

同じ目的地を目指し、同じように準備をしてきた二つの日程でありながら、一方は予定通り歩き、一方はバスから降りることさえできなかった。自然を相手にする行事だからこそ、このようなことが起こる。特に B 日程の生徒にとっては、準備を重ねてきただけに、残念な思いも大きかったと思う。しかし、遠足の価値は目的地を歩けたかどうかだけで決まるものではない。自分たちでは変えることのできない状況に出会った時、それをどう受け止めるのか。そして、安全のために「やめる」という判断を受け入れることも含め、A 日程と B 日程それぞれに異なる経験をした遠足となった。

体操会や文化祭においては、共学 1 年目に生まれた新しい形を、2 年目の生徒たちがさらに自分たちのものとしていった。かつて「男子のもの」「女子のもの」とされていた枠を越え、一人ひとりが自分のできること、やりたいことを考えて参加することが、少しずつ自然な姿となってきた。

伝統とは、過去と同じことを繰り返すことだけではない。これまで大切にされてきたものの意味を考え、今ここにいる自分たちにふさわしい形へと受け継いでいくことでもある。共学 2 年目の行事には、そのような「継承と創造」の姿が見られた。

【委員会活動】

2025 年度も、委員会活動は高等部の自治生活の中心となった。今年度は 6 つの期が、それぞれの目標を掲げて生活をつくった。

1 期「聞き入れる強さ」

新しい年度のスタートにあたり、自分の意見を伝えるだけではなく、相手の言葉を「聞き入れる」ことを大切にした。聞

くことは受け身ではなく、自分とは異なる意見を受け止める「強さ」が必要であるという思いが込められていた。

2 期「隣人の輪を広げる」

いつも一緒にいる友人だけではなく、普段あまり関わることのない人にも目を向けることを意識した。高等部の中で、自分にとっての「隣人」とは誰なのかを考え、つながりを広げようとした。

3 期「我が身の骨を折る」

誰かがやってくれるのを待つのではなく、まず自分が動く。自分の時間や力を使い、仲間や社会のために働くことを大切にした。

4 期「無駄に挑む」

効率や成果だけを求めるのではなく、一見すると「無駄」に思えることにも意味があるのではないかと問いかけた。人と話すこと、時間をかけて考えること、遠回りをすること。自治において大切なものは、必ずしも効率だけでは測れないことを考えた。

5 期「共鳴と飛翔」

一人ひとりの思いや働きが互いに響き合うことで、それぞれが一人では到達できないところへ進んでいくことを願った。年度末へ向かう中で、高 3 から下級生へ生活を引き継ぐことも意識された。

6 期「原点回帰」

一年間の最後に、改めて自由学園の自治とは何なのか、自分たちが大切にしてきたものは何なのかを振り返った。新しいものを創るためにも、一度原点に戻り、次の年度へ何を手渡すのかを考えた。

この六つの言葉を並べると、2025 年度の高等部の歩みそのものが見えてくる。「聞く」ことから始まり、「隣人」へと目を広げ、自ら「骨を折る」。そして「無駄」にも挑み、互いに「共鳴」し、最後にもう一度「原点」へ帰る。

自治とは、委員会だけが行うものではない。高等部に生活する一人ひとりが、自分たちの社会をつくる当事者として、「自分とみんなにとってのよいことは何か」を考え、それを実践していくことである。今年度の六つの委員会は、その問いをそれぞれの言葉で高等部全体に投げかけ続けた。

【寮生活】

寮生活もまた、自治を最も具体的に経験する場の一つであった。生活時間、掃除、食事、部屋での過ごし方など、日常の小さなことにこそ、一人ひとりの価値観の違いが現れる。自分にとっての「当たり前」が、相手にとっては当たり前ではない。そのことを知り、話し合い、時には譲り、時には自分の思いを伝える。共に暮らすからこそ生まれる葛藤そのものが、人と共に生きるための学びとなった。

上級生から下級生へと生活を伝える伝統を大切にしながらも、これまでの方法をそのまま踏襲するのではなく、「今の私たちにとって何がよいのか」を考える。寮は今年度も、「自治」を言葉だけではなく生活の中で実践する場であり続けた。

■おわりに

共学 2 年目の 2025 年度を振り返ると、「共学になった」という大きな変化そのものを意識した 1 年目から、その環境の中で「どのような高等部を自分たちで創るのか」を考え、実践する 2 年目へと歩みを進めた一年だったように思う。

尾瀬への遠足では、同じ計画でありながら、A 日程は予定通り自然の中を歩き、B 日程は雷雨のためバスを降りることなく引き返した。平和について考え、体操会や文化祭では仲間と共に行事を創った。毎日の食卓を囲み、暑い日には草を刈り、秋には落ち葉を掃いた。委員会では意見が合わず、時間をかけて話し合うこともあった。そして年度末には、高 3 が自分たちの手で仲間の昼食をつくった。

予定通りにできたことも、できなかったこともあった。うまくいったことも、葛藤したこともあった。そのすべてが 2025 年度の高等部の生活である。大切なのは、いつも思い通りになることではなく、目の前に起きていることに向き合い、その時の自分たちにとって何が「よいこと」なのかを考え、判断し、行動することである。その積み重ねの中に、「自由のための自労自治」の学びがあった。

共に生活すれば、必ず違いが現れる。その違いをなくすことが「共生」なのではない。異なる考えを持つ相手の言葉を聞き、自分の考えも伝え、時には葛藤しながら、それでも共に生きていく道を探し続ける。そのためには、相手を受け入れる「寛容」と、自分自身を鍛える「鍛錬」の双方が必要である。そして、その根底にあるのは「信頼」なのだと思う。相手を信頼し、自分もまた信頼される存在になろうとする。その関係の中から、まだ見えていない未来への「希望」が生まれる。「自治」「鍛錬」「寛容」「信頼」「希望」。これらは特別な行事の中だけで育つものではない。毎朝の礼拝、授業、食事、掃除や労作、委員会での話し合い、寮での生

活、そして友人との何気ないやり取り。その日常の一つひとつを丁寧に生きる中で育まれていくものである。

創立者の羽仁もと子が大切にした「思想しつつ、生活しつつ、祈りつつ」という言葉のように、考えることと生活すること、そして祈ることを切り離さずに歩んでいく。その日々の営みの中にこそ、自由学園の教育がある。

共学 2 年目を終えた今、「共生共学」は完成したものではない。生徒が入れ替わり、社会が変化していく中で、その意味を問い続け、毎日の生活の中で創り続けていくものなのだと思う。これまでの歩みに感謝しながら、生徒一人ひとりが自ら考え、他者と共に働き、「平和を願う人」から「平和を創る人」へと成長していくことを願っている。そして、生徒・保護者・教職員、学園に連なるすべての人たちが互いを信頼し、希望を持って、「愛にあふれるあたたかい高等部」をこれからも共に創っていきたい。